

山村青年たちの生活記録運動

—高知県幡多郡津大村須崎の機関紙『夜学会』の事例—

河森 正人*

The “Life Writing” Movement of Young People in a Mountain Village in Kochi Prefecture

Masato KAWAMORI

はじめに

生活記録運動とは、「農村や工場の青年、家庭の主婦の間で、生活をありのままに書き、仲間で読み合い、新しい生き方を話し合うサークル活動」であり、1950年代に全国各地に広がった運動である（『コトバンク』）。本稿の目的は、鶴見和子が1957年の第7回高知市夏期大学でおこなった講演のなかでも引用している、高知県幡多郡津大村須崎（現四万十市西土佐須崎）の夜学に通う青年たちの機関紙『夜学会』を題材にしながら、山村の青年たちが、戦後高度経済成長のかすかなきざしと、なかなか改善に向かわない生活のはざままで、どのような思考の軌跡を描いたのかを動的にとらえながら記録することである。戦後高度成長の初発段階における地方の生活資料とりわけ生活記録運動関連の一次資料については、まだまだ発掘の余地がある。「生活記録を記録する」努力が求められているといえよう。

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系・教授（kawaphon@hus.osaka-u.ac.jp）

1. 生活記録運動とはどのようなものなのか

1.1 生活綴り方運動と生活記録運動

鶴見俊輔が指摘するように、戦後における成人の生活記録運動は、戦前の小学校教育における生活綴り方運動の延長線上にある（鶴見 2010）。戦前の小学校教育における生活綴り方運動についてみると、小砂丘忠義（高知県長岡郡大豊町出身、雑誌『綴方生活』編集人）を主唱者とする生活綴り方運動は、大正デモクラシー期における芦田恵之助の「随意選題」の綴り方、鈴木三重吉の「赤い鳥」の綴り方の系譜に連なるとされる（飯田 2013:55-56）。また、戦後における成人の生活記録運動は、戦前期に日本共産党の大衆運動として出発し、昭和 20 年代後半以降、党とは一定の距離を置くようになる、いわゆる「サークル運動」を嚆矢とするともいわれる（岡 1992:122-123）。

内容面についてみておくと、大正デモクラシー期の綴り方では、教育勅語に出発する「君のため、国のため」の教育に支配された綴り方を斥け、代わりに、自己のために、生活のなかの事実をありのままに書くということが目指されたわけであるが（飯田 2013:55-56）、他方、1920 年代末にはじまった生活綴り方運動では、文章表現というものを、生活を耕す耕運機のようなものとしてとらえる、すなわち生活を改善するものといった踏み込んだ理解に変化していったわけである。さらに、戦後の生活記録運動はこうした動機を継承しつつも、戦後も根強く残る封建遺制からの脱却を目指した。生活記録運動の集団的性格は、被抑圧的でメンバーの意見表明の自由度が高いという意味において、講に代表されるムラ社会の「つきあい」的な小集団の伝統からはあきらかに断絶していた（岡 1992:122）。

1.2 生活記録運動

辻智子によれば、生活記録運動という言葉は、1954 年に日本青年団協議会によってはじめて用いられ、翌 55 年には同協議会によって機関紙『生活記録運動』が発刊された（辻 2010:6）。さらに同じく 55 年に、国分一太郎は、おとなが綴り方作品を書く運動が生活記録運動であると『生活綴り方ノー

トⅡ』（新評論社）に書いたし、鶴見和子も国分と同じような把握の仕方をするとともに、生活記録運動は生活綴り方という一定の枠組みを設定しつつも、その表現形式は厳密なものではなく、自由で独立した人間が所属集団の問題を話しあい、書きあい、行動しあう実践であるとおおまかにとらえた（辻 2010:7）。さらに辻は、東亜紡績泊工場の労働組合の生活記録運動を引き合いにだしながら、『新しい』『近代的』『民主的』な青年・労働者の連帯的な行動によって、『古い』『封建な』日本社会を変えていくという構図」がそこにあり、そうした先進性は、「一つには労働組合や自治会などの日常的な活動、二つに戦争に対する危機感と平和への希求、三つに先駆的モデルとしての『新中国』への憧憬といった経験によって裏づけられるものであった」と指摘した（辻 2010:8）。本稿でとりあげる高知県幡多郡津大村須崎の青年たちの機関紙『夜学会』においてもほぼ同様のことを指摘しうる。

1.3 知識人とひとひと

鶴見和子は、1952年に岐阜県中津川市で開かれた第1回作文教育協議会で無着成恭や国分一太郎に出会い、「これだ」というような感動を受けたと回想している（鶴飼 2012:6）。鶴見が「これだ」と感動したのは何かというと、共通の生活実感を媒介として、教師と生徒がともに自己改造をおこなう場としての生活綴り方運動であった。当時、『思想の科学』に集った知識人や、生活改善運動に関係した知識人がいたわけだが、鶴見はここで、知識人としての自己批判をおこなっている。

「これをわたくしは5年前に『自己をふくむ集団の問題として問題を見る態度』というようなことばで言ったんですけども、やはり学者なり思想家なりが、自己をふくむ集団として日本及び日本人を見るという態度に立つのでなければ、思想なり学問なりはほんとうに役に立つものにはならないんじゃないか。というのは、いくら農村調査したり漁村調査したりして『日本は封建的である』とか『貧乏である』と言ってみたとところで、その調査をしている学者なり先生なりの生活が、封建的な生活の上にあぐらをかいている」のである（鶴飼 2012:7）。

津大村須崎の青年たちは、鶴見和子をはじめとする知識人の動向にもおおいに関心を払っており、自分たちの生活を見つめるための糧として彼らの知見を活用した。他方、知識人自身の思考様式も変化していたのである。

2. 高知県下における生活綴り方と生活記録

前出の小砂丘忠義は、高知師範学校卒業とともに故郷の長岡郡東本山村（大豊町）の小学校に赴任したが、そこで文集『山の唄』を発行しはじめた。1919年のことであった。その前後に、青年文集『土を踏みて』、児童文集『おとどい』、俳句同人誌『むくり』などをつぎつぎと発刊し、綴り方教師として知られるようになった。また、同窓生とともにSNK協会を設立し、雑誌『極北』を発刊した（広谷 1996:30）。さらに1924年になって、幡多郡で綴り方運動を軸に官僚主義的教育への批判をつよめていた上田庄三郎（幡多郡土佐清水出身）らとともに地軸社を結成し、『極北』の後継となる『地軸』を発刊した。

しかし1925年になって、当局の締め付けに嫌気がさした小砂丘忠義や上田庄三郎は相次いで上京し、活動の拠点を東京に移した。とはいえ、高知県における生活綴り方の運動は、その後「土佐綴方の会」に受け継がれることになる。また、1930年から36年にかけて、『夜須村誌—郷土調査』など郷土史をあつかった読本が県下の学校で数多く出版され、国定教科書の画一化に抗する生活綴り方の流れが、ここでも継承されることになった。なかには、『本山教育』（本山尋常高等小学校）のように、きわめて大部のもの（謄写本330ページ）もあった（広谷 1996:38-39）。

幡多郡では、終戦直後の1946年5月に幡多郡連合青年団が結成され、同7月には北幡区連合青年団が発足した。北幡区連合青年団の当初の活動は、戦前からつづいている北幡青年大会（陸上競技や国語・算数などの学科種目を競う大会）などの運営が中心であったが、その後の1950年の朝鮮戦争などの国際情勢を受けた青年団活動の中央レベルにおける方針変化、すなわち政治・社会問題についての共同学習運動の重視という流れもあり、徐々に変容していく。この共同学習運動の基盤となったのが「生活記録」である。

1948年頃から、アメリカ式のレクリエーション活動、グループワーク、会議・討議の手法が日本に流入するようになるが（梨 1996:126-127）、それと並行する、あるいはそれに対抗するかたちで、戦前の生活綴り方の流れをくむグループワーク、会議・討議の手法が持続したのである。

こうした流れのなかにあつて、北幡5ヶ村（大正村、西上山村、十川村、江川崎村、津大村）における生活記録運動の嚆矢となつたのが津大村須崎の青年団のそれである。同地区で生活記録についての学習がはじまるのが1951年というから（梨 1996:128）、山形県山元村中学校の無着成恭の指導による『山びこ学校』が発行されたのと同じ年ということになる。そして1952年になって同地区の夜学に通う青年たちの機関紙『夜学会』が発刊された。さらに、同青年団の指導的地位にあつた新改教が、1953年4月に高知市で開かれた第2回全国教育者研究大会に参加するにいたつて、同青年団の生活記録運動の方向性が確立されることになる。

この『夜学会』につづいて、1954年頃から北幡地区の単位青年団がつぎつぎと生活記録の機関紙を発行しはじめた。『むぎめし』（津大村岩間）、『山びこ』（津大村中半家下）、『清泉』（津大村奥屋内）、『青い麦』（津大村大宮）、『手のひら』（津大村藤の川）、『手をとらあつて』（津大村藤の川女子部）、『せんだん』（江川崎村西ヶ方）、『私たちのあゆみ』（江川崎村半家）、『かたつむり』（江川崎村本村）、『せせらぎ』（江川崎村権谷）、『あゆみ』（江川崎村権谷女子部）、『ふじのせ』（十川村広瀬）、『あこがれ』（昭和村小野）、『あさぎり』（大正町江崎）などがそうである（梨 1996:128）。

3. 高知県幡多郡津大村須崎の機関紙『夜学会』

3.1 急進主義と漸進主義

『西土佐村史』によれば、この地域では、1909（明治42）年ころから「村内各校を会場に夜学会を開催し、指導者は学校教員が当り農繁期6月・10月を除いた期間1週間に2回乃至3回の夜学を実施」してきた。津大村における生活記録運動は、こうした夜学の伝統のうえに成立したものであり、その成果が発表された機関紙が『夜学会』であつた。須崎校下夜学運営委員

会の編集による『夜学会』は1952年4月に創刊され、現存するものから判断するかぎり、第19号（1957年11月）まで5年あまりにわたって続いている。以下、津大村須崎青年団の指導的地位にあった先述の新改敦が『夜学会』第3号（1952年11月発行）に書いた「農村夜学会の危機」と題する文章をもとに、運動初期の様子を振り返っておこう。

同氏が青年団に入団した1948年頃の夜学会の状況はというと、週1回、国語と数学の科目があったが、その後1949年になって、社会と英語が加わって計4科目となり、開催日も週3回となった。また、グループ制が導入され、団員は4つの科目のいずれかに属し、自分が属する科目が実施される日に出席するというかたちになった。その後、運営方法で試行錯誤を重ねながら、「習慣の様になって何年か続いてきた“農村の夜学”という固定した殻の中からやうやくに抜け出して新しい意味での“夜学”と云うものを生み出した」のである。

しかし、学力レベルがばらばらであるという夜学の宿命のなかで、会員が徐々に離れていくという状況に直面するようになる。現状の教科内容を引き上げるか、引き下げるか、あるいは維持するかという選択を迫られるなかで新改が出会ったのが、無着成恭の『山びこ学校』や鈴木道太の『生活する教室』であった。山びこ学校に、「共通の生活実感を媒介として、教師と生徒がともに自己改造をおこなう場」を見だして感動したのが鶴見和子であったが、新改の受け止め方は別であった。新改のばあいは、「新しい意味での“夜学”すらも「都市中心主義的」な傾向をつよめる教育の影響下にあり、農村生活のうえに立った「山びこ学校」や「生活する教室」にみられるような「農村の教育」こそが夜学会のあたらしい道筋であると理解したのである。新改は、「都市中心主義的」な教育を批判して次のようにいう。「中学何年かの社会科の教科書の中に農業は非常に気候のよい山間地で行はれ仕事も適当なものであり健康の為に非常によい仕事である、と云う様に書かれてあるのをみた。毎年毎年雨の日も風の日にも、みのを着てぬれながら働いても尚税金に追はれて僅かな休養の暇さへみ出す事のできない百姓の実際の生活とは、およそスッポンの差であらう」。新改が、タイトルにあえて「農村夜学会」と記した理由がここにある。

このように、新改が「農村の教育」の追及というテーマを軸に当事者意識を高めていったのにたいし、畠中稔は明治以来の勤労青年にたいする教育

の制度的限界に対峙するなかで当事者意識を高めていった。畠中は『夜学会』第3号に書いた「夜学について」のなかで、明治期にドイツから移植された青年実業補習学校から、当時の定時制教育、通信教育、青年高等学院にいたるまでの経緯をたどったうえで、明治以来の青年教育に学ぶべきところはないとするばかりか、「唯青年教育と云うもの『ばくぜん』たる態度でのぞんで居った場合、青年の動きそのものをそっくり利用されないとも限らない」とまで断言した。さらに畠中は、夜学教師のなり手不足に言及しつつ、「須崎校下の青年教師等は次第と青年夜学会から離れていくのが現状ではなからうか」と危惧した。

覆面子のほうは、『夜学会』第3号の「切に機関紙に望むもの」のなかで、言論弾圧が解除された戦後に雨後のタケノコのように発刊されるようになった地方誌をつうじて、「物云うすべを知らず」、「沈黙をよぎなくされた」一般大衆がおぼつかない足取りながらも自己表現をしはじめたことに期待を寄せて次のようにいう。「日本文化—それは少数の文章達者な学者たちによってのみ表はされるものではない。一般大衆の多種多様なひしめきの中にこそ見出されるべきであると思われる—この意味においても私は地方紙の出現を切に期待するものであるが—」。いうまでもなく、国民ひとりひとりが「物云うすべを知らず」、「沈黙をよぎなくされ」るなかで戦時体制が抗しがたくかたちづくられていったことに対する反省と、これを繰り返さないことへのかたい決意がその背景にある。こうした当事者意識が、「我々青年の関心が歴史的、社会的現実をはなれて、国際情勢え目をふさいで如何にして生きることが出来るというのだろう。（中略）津大村は国際情勢の流れの、らち外に生活できる」はずがないというような表現になって表れている点にわれわれは着目すべきだろう。いまだ経済的発展の展望が不確かな山深い寒村と国際情勢を連結させる発想は、分村というかたちで政府の満蒙開拓に加担せざるをえなかったこの地域特有の戦争体験なしには成立しえなかったことだろう。

さらに、『夜学会』の編集子が、「第三者的傍観者たるこ（と）なく実に、めまぐるしき、この社会的現実の中に自己を生き抜かんとする青年」をめざすといったことについて、覆面子が、『『社会的現実国際情勢えの対決』の在り方も自ら変化しなければならないだろう。本当に借り物でなくなるために自己の属する地域の特異性に根をおろした『自分のもの』となることを要

求すべきであろう」との具体的道筋を提示している点に注目したい。覆面子は、「物云うすべを知らず」、「沈黙をよぎなくされた」青年たちが、現実のなかで自己を生き抜くすべとして「書く」ことについて、まずは「借り物」のことばで「大言壮語」をつづることを肯定したうえで、この「借り物」を自己が属する地域の現実でもって語りなおすことができるようになるまでの「長い過程」あるいは「完成への道」こそが『夜学会』なのだとしたのである。

他方、夜学会運営委員会委員長として、会員減少問題をもっとも切実にとらえていた新改は、『夜学会』第5号（1953年7月発行）の「生活綴方の障害」を、過去の作文教育を批判することからはじめる。新改によれば、過去の作文教育では、あることがらを「できるだけ誇張して、できるだけ美しい文章で、事更に感動した様に、書きさえすれば、綴方は上手だと云って百点をもらっていた」。続けて、うれしいことがたくさんがあればいくらでも作文を書けたらろうが、しかし、家が貧しいばあい、はずかしくてそのことを題材に作文を書く雰囲気ではなかったし、もし書こうものなら、先生から叱られるか、ひがんでいられると思われるのが関の山であるとして思いとどまるような自己規制が生徒の側にあったという。であるから、戦争ごっこや水泳といった「どうでもよいこと」を選んで書き、実は家が苦しく父親が相当無理をして中学校に出してくれたことを、ほんとうは理解していなかったのだという。

新改は続けて、「自分の生活がこれだけなものだと云う現実をはつきりつかんだならば、次には他の家との比較に於て、更に進めば、労働者と資本家の生活の比較に於て、本当に生活が楽なのか、苦しいのか、が、はつきりと解つて来るのだらう。又自分の村に封建性を一つでも、はつきり指摘する事が出来たならば、次には他の村との比較に於て、或は都会との比較に於て、それは農民にとつて利となるものか、不利となるものであるかが判定される訳である。その比較までの段階として、私は生活綴方が必要だと思う」と述べる一方で、「オラ等は、なるだけ堅苦しい事云わんち、なんちやあやつてみけるがヂヤケンね」といって堅苦しい事を嫌う風潮が、権力者の農村軽視を助長する、だからそれを阻止するために農村夜学会の綴り方（生活記録）が必要なのだとした。

初期の『夜学会』でもっとも注目すべきことは、上山行久と新改敦という

新旧の夜学運営委員会委員長のあいだで繰り広げられた生活と学問をめぐる論争である。すなわち、上山は『夜学会』第3号の「夜学会の現状と今後の対策」で、生活に直接関係ある学問（計測関係の数学など）と生活には間接的でよい学問（歴史、思想など）にわけ、20歳未満のものは前者を、20歳以上のものは後者を学習するといった具合に、二部制（二学級制）を採用すべきだとした。

これにたいし新改は、『夜学会』第4号（1953年3月発行）の「今後の夜学の在方」で、上山は前者を「生活のための学問」、後者を「学問のための学問」としてとらえているが、じつは双方とも生活のための学問なのであり、分離してとらえることはできないという主張を展開した。すなわち上山のいう「生活」は、「ただ、どうにか食うて、着て、住む」というレベルのものであるが、もし上山のいう「生活のための学問」でもって生活改善をかさねても生活がよくなるのであれば、それは現行の社会の仕組みそのものに欠陥があるからであり、その欠陥を解決するには歴史や思想についての理解が不可欠であるとしたのである。いいかえれば、「私達の現在の生活の苦しさが、おそらく歴史的な裏付けに依って実証され、完全に思想的な流れの上に立ってこそ私達は平等の権利を主張することが出来るの」であり、こうした課題は上山のいう「生活のための学問」すなわち計測等の数学だけでは解決できないというのである。

以上の論争をふまえ、修養会において、畠中稔を司会とする討論会が実施された。そのなかでの参加者の発言が、『夜学会』第5号の「今後の夜学はどう進むべきか」に掲載されている。

まず、上山和位が「研究の発表」と称して上山（行久）と新改の主張にたいする見解を述べた。上山（和位）は、双方の意見に耳を傾けるべきとしながらも、結局は、「浅はかな」自分は生活に直結した「ただ、どうにか食うて、着て、住む」という、「その日暮らしに役立つ」教育をしてほしいという自虐的な（新改にたいしては批判的な）表現をもちいて上山（行久）支持の立場を示した。西岡成人は、上山（行久）のいう二部制には反対で、「生活のためになる勉強」（上山（行久）のいう「生活のための学問」）も「学問として深いものを勉強すること」（上山（行久）のいう「学問のための学問」）も生活のための学問なのであり、分離してとらえることはできないという新改の主張を支持した。結局、生活と学問をめぐる論争は平行線のままで終

わった。

しかし討論会の終盤で、上山行久が、真の対立軸は夜学の主眼を「平和教育」におこうとする新改の考え方と、「農村開発」におこうとする自分の考え方なのであるとの趣旨の指摘をするにいたって問題の所在が明確になることとなった。すなわち、新改のほうは再軍備への懸念を深める一方で、社会の仕組みそのものを変えることによって百姓の立場を引き上げることを最終的に目指したのにたいし、上山（行久）のほうは生活改善を積み重ねること等をつうじた農村開発こそが必要なのだとしたのである。上山（行久）は、おおくの会員が平和教育の必要性を感じていないなかでの新改の主張には無理があり、生活に必要な橋や農道を建設する要求からまずははじめる必要があるとしたのである。他方、新改が最終的に意図するところは、変革主体の形成であり、彼の目には上山的な行き方は漸進的あるいは現状維持に終始するだけだと映ったのではないだろうか。

3.2 いま、ここで、みなと生きること

こうした路線対立の一方で、議論の前提となる村の現実を認識するために実施されたのが各種の実態調査であった。夜学会が実施した調査には以下のようなものがあつた。夜学会運営にかんする意識調査（夜学会会員 36 名が対象、『夜学会』第 3 号で調査結果公表）、1953 年 11 月の秋祭りの支出にかんする調査（『夜学会』第 7 号で調査結果公表）、田役・田植にかんする実態調査（『夜学会』第 9 号で調査結果公表）、1954 年秋祭りの支出にかんする調査（『夜学会』第 10 号で調査結果公表）、1954 年 10 月の台風被害にかんする調査（『夜学会』第 10 号で調査結果公表）、1954 年 12 月に実施された供米にかんする実態調査（『夜学会』第 11 号で調査結果公表）などがある。表 1 は 1954 年の調査計画であるが、その具体的な調査結果の一部が『夜学会』誌上（第 9 号～第 11 号）で報告されている。

他方、このような熱心な活動とは裏腹に、さらなる夜学会の出席率の低下と会員数の減少に直面するようになった青年たちは、夜学のあり方の見直しに迫られることになる。見直しのひとつは、1955 年 10 月から実際に綴り方教室が開催されるようになったことである。もうひとつは、1956 年 3 月から、週 2 回火曜日と金曜日の夜 8 時から 10 時半まで開催されていた夜学

会が週 1 回の開催となり、必要に応じて 2 回実施することになったことである。

表 1 社会科を中心とした問題解決の学習（1954 年度、月別）

月	問題	調査	討議
5	勤労－田役から田植えまで	田役の総数及苗代の方法、研究課題（田植日記）	メーデーと勤労者、憲法の中の勤労者、税金と勤労と私達、今の田役の形式からぬける
6	衛生	中央の衛生の方法 先進青年団の衛生運動の方法	谷岡保健所長を招いて講演、討議
7・8	原爆について	原爆力の調査、原発力、原発禍	米国独立と原爆 原爆記念日、終戦記念日と原爆
9	台風		農業との関係
10	共同募金	何にかわれるか	募金と私達農民
11	秋祭り	経費の調査	全村一致にする方法
12	米の供出	部落や村内での供出状況、量、値段	
1	旧節季	旧節季にどんな問題があるのか	
2	婦人参政権	婦人参政権の実施と其後の有様	
3	津大村の予算	予算はどんなにして組むか、今年予算、村税の種類と額	どんな方面にどれだけ使われているか、我々の勤労所得と税金額は適当か

出典) 『夜学会』第 9 号（1954 年）。

このように 1955 年前後に夜学会の実施形態が変更となるなかで、この時期から、『夜学会』の内容がおおきく様変わりしていることに気づく。すなわち、夜学会を牽引する運営委員会のリーダーたちによる大上段に構えた議論が鳴りを潜め、そのかわりに父親の生きた歴史、母の健康、それぞれの

職場での労働のあり方など身近な親密圏の歴史、生活描写が主体となっているのわかる。

たとえば、刈谷智明は「俺は営林署の月雇い作業員」を書き、そのなかで、380 円の日給をえるための過酷な肉体労働が延々と続く日常のさまを描いた（『夜学会』第14号、1955年11月発行）。また刈谷は、『夜学会』第17号（1957年1月発行）に「この嬉しさを僕は忘れない」と題する文章を書き、そのなかで職場での団体交渉の様子を描いた。23名の月雇い労働者のうちの何人を常雇いとするかという交渉の様子である。結局、労働者側は7人という条件を呑んだわけであるが、女手ひとりですたりの子どもを育てながらも、月雇いの身分によるこんで留まることを選んだおばさんに、刈谷は「この嬉しさを忘れ」ないと感謝の気持ちを綴ったのであった。

青年たちは、このようにいっこうによくなならない生活を前に、「あのにくたらしい山に日光はさえぎられているのだ。そうだ。あの山を倒そう」（上山鋭範「起き上がろう」『夜学会』第14号、1955年11月発行）と意気昂揚するときもあれば、「こんな谷間の中で俺の人生は一生進まないのかも知れない。（中略）ただ俺に解っていることは生のうえに生を重ねるこの事だけなのだ」（岡山静功「暗い谷間より」『夜学会』第13号、1955年8月発行）といったぐあいに悶々とした感情に苛まれるときもあるのであった。「一日中いや毎日六十才ちかいおやちと二人きりで炭焼きをしている」上崎由一にいたっては、「明日もまた今日と同じだろうか」、「こんな生活はいやになった」、「いつそのこと死んだ方が良くないんぢやないか」（『夜学会』第11号、1956年3月発行）とあって絶望した。

理想と現実とのあいだで揺れ動く、この時代の山間の青年たちにとって、都会にでて働くという選択肢はまだまだ現実的ではなかった。他方で農村人口の増加という状況があったために、家族内でのあらたな葛藤も生まれるようになった。長男・次男三男問題である。苦しいとはいえ生産手段を継承することができる長男とちがって、次男三男は「給料取りでない限り生活は安定」せず、結婚もままならないのであった（岡村さとし「長男と次男坊」『夜学会』第15号、発行年月不詳）。

このように、青年たちはいっこうによくなならない生活を憂う一方で、家族や夜学会の仲間と、いまここで生きることができているという事実に関心感を見いだしているようでもある。一面においての「現状肯定感」とでもい

おうか。新改は、『夜学会』第13号（1955年8月発行）で「石かけ」と題する文章を書き、そのなかで、キビの粉やイモの切り干しを食べながら石かけを積み上げて三反八畝二十九歩の田を作り上げた父の苦労も知らないままに、中村で勤労奉仕や防空壕掘をして戦争に加担していた自分を恥じている。その一方で、父親がつくった田んぼを自分と家族の手で拡張していくことにおおきな喜びを見いだしている。以下、新改のそうした気持ちを綴った文章である「地ぶしん」を引用しておこう。

あたらしい田んぼができた。
三畝二十歩
おらがはじめてつくったおらの田んぼ

今年は勲が中学を出たので
おふくろが勲と久子と幸夫を相手に
掘りはじめた
おらも山仕事のひまをみては
水もりをしたり石かけをついたり
ドサを打ったりした
二畝余りのまがりくねった二つの田んぼだったのが
三畝二十歩の広い田んぼになった

おらはこの田んぼが一番可愛い
毎朝歯を磨きながら見に行く
四反に近いたんぼを自分の手でつくったおやぢは
どんなだったろう
おらはこのごろになって
百姓の土地をかわいがる気持が
わかってきたようだ

（新改敦「地ぶしん」、『夜学会』第16号、1956年7月発行）

このように青年たちは家族とともに働き、生きていくことに喜びを見いだす一方で、夜学の仲間どうしのあいだの関係にも変化がみられるようになった。これまでは、男性側が女性側の『夜学会』への投稿が少ないことをやや批判的に指摘していたのだが、女性側の労働の厳しさに思いを馳せ、いたわりの気持ちを文章として『夜学会』誌上に綴りはじめたのである。こうした女性にたいするまなざしの変化が影響してか、女性側の投稿が目に見えて増えるようになった。もちろん、直接的には第14号の発行時（1955年11月）あたりから綴り方教室が開催されるようになったことが影響しているのかもしれない。以下、西岡成人の「娘達よ」と題する文章（一部）、新改久子の「蚕詞い」（蚕飼い）と題する文章を順に引用しておこう。

俺達の部落十五町歩の田に
水を引く
お前のかたがこの水を引くのだ
そうしてこの田に
お前が苗を植えるのだ

お前のかたで水を運び
お前の手で苗を植えた
黄金の波を待とうではないか
娘達よ その時こそ
その時こそ
大きく 大きく
笑おうぢやないか

（西岡成人「娘達よ」、『夜学会』第16号、1956年7月発行）

私はここ二年位い川崎に蚕詞いに行くので、或るお婆さんは、今度も蚕詞いは川崎かの、とおぼえられている。自分の家にも蚕を少々かっているが、やっぱり出て働かなければ、自分が金を自由に使うことが出来ないので、家はほったらかし出て行く。人の家はいくら良い所でも苦労

が多い。いやな仕事でも自由は云えない。桑取りに行くのに車をひいて行かなければならない。町の中を車ひきが一番いやだなーと思う。お天気ならともかく、雨の日などカッパを着て町を通るとお嫁さんにもらい手もないなと思う乍ら、なるたけ下むきになってとおる。きれいに着かざった娘さんを見ると、汚れたエプロンをかけ、ドロだらけのモンペをはいて居る私を考えた時、なんだかコジキ同様にしか同えない。純毛のスカートをはき、ナイロンのブラウスを着たおつとめの人を見た時、あれでこそ青春の夢があるだろうなーと、うらやましくなる人間位い差のあるものはないと、腹だたしくなる時もたびたびあったが、こんな時心の支えとなってくれるのは夜学会の話会だった。農家に生まれた私は、せめてこんな考えおこしてはいけない。私等が百姓しないで誰がするのだろう。こんな話合いを思い出してーあたえられた仕事に精出した。

(新改久子「蚕詞い」、『夜学会』第19号、1957年11月発行)

むすび

すでに述べたように、1955年頃つまり『夜学会』第13号あるいは第14号あたりから、初期の同誌上で交わされた大上段に構えた議論が鳴りを潜め、そのかわりに父親の生きた歴史、母の健康、それぞれの職場での労働のあり方など身近な親密圏の歴史、生活描写が主となり、同時に家族や仲間といまここで生きていることにたいする感謝と喜びが綴られるようになる。他方で、1955年といえば、一般的に戦後高度経済成長の起点となる年であるとされ、そうした時代の変化にともなって、故郷をあとにする仲間もちらほら出てくるようになる。

初期の理想と夜学の停滞傾向のあいだでとまどう青年たちの様子が、『夜学会』第19号の末尾に掲載された、夜学のメンバーの話合いの記録のなかにみてとることができる。そのなかで、『夜学会』第17号において営林署での団体交渉の様子を描いた刈谷智明は、「これから先がうたがわしい。やっぱり自分だけをかかわいがる人間ばかりになりそうで」という一方、話合いの

終盤では「青年の時代の考えを持ちつづけたい、ぜったいに」と述べている。これを受けて西岡成人は、個人本位の営農を見直し、農研や農協の活動によって収穫高をあげるようになった大宮地区の農業に言及している。そこには、初期の運動でみられたような、社会の「むじゆん」（原文のまま）にたいする大上段に構えた気負いはない。そこにあるのは、須崎の地に踏ん張って、家族や仲間とたすけあって着実に農を維持しようとする決意である。話合いのいちばん最後に発せられた、敦（出稼ぎにでていた新改敦と思われる）の「一人前の人間」という言葉にそのことが集約されているようにも思われる。機関紙『夜学会』は、こうした決意を確認する場として重要な役割を果たしたといえよう。

（本稿の執筆にあたって、新改敦氏および西岡成人氏、そして四万十市社会福祉協議会西土佐支所の今城久枝さんにお世話になった。西岡成人氏からは、『夜学会』の原本をお借りした。記してお礼申し上げたい。）

参考文献

- 飯田和明 2013 「生活綴方教育前史の検討—芦田恵之助の『随意選題』における『自己』」『学校教育学研究紀要』 6:55-73。
- 鶴飼正樹 2012 「講演記録 鶴見和子『現代思想と生活記録運動』」『人間学研究』（京都文教大学） 13:1-29。
- 岡知史 1992 「日本のセルフヘルプグループの基本的要素—『まじわり』『ひとりだち』『ときはなち』」『社会福祉学』 33(2):117-136。
- 辻智子 2010 「1950年代日本の社会文化的状況と生活記録運動—生活記録運動の系譜に関する研究(2)」『神奈川大学心理・教育研究論集』 29:5-19。
- 鶴見俊輔 2010 「大衆の思想：生活綴り方・サークル運動」久野収・鶴見俊輔・藤田省三編『戦後日本の思想』 368pp.、東京：岩波書店。
- 梨順一郎 1996 「模索しながら歴史をつづった青年団活動」北幡青年大会史編纂委員会編『北幡青年大会史』 251pp.、北幡教育委員会連絡協議会。
- 広谷喜十郎 1996 「土佐青年史」北幡青年大会史編纂委員会編『北幡青年大会史』 251pp.、北幡教育委員会連絡協議会。